環境学習活動におけるPTA委員の企画・運営意識の高揚方策
－環境NPOによる西宮市内小学校のPTA活動への支援を通じて－

学籍番号　1713　氏名　戸川健太郎
指導教官　市川智史助教授

1．はじめに

わが国では、今後の環境教育の推進において学校、地域、企業、家庭、行政など様々な主体が連携して、継続的かつ体系的に子どもたちの環境学習活動を支援していくことが求められている。また、小学校PTA活動においても、環境学習活動に取り組むケースが増えつつあり、PTA委員の学校・家庭・地域での環境活動をつなぐ役割も期待されている。

兵庫県西宮市では1998年に市の呼びかけで市民・事業者・行政のパートナーシップで設立された任意団体「こども環境活動支援協会」（以下 LEAF：Learning and Ecological Activities Foundation for Children）が、市の環境学習事業「地球ウォッチングクラブ・にしのみや」（EWC：Earth Watching Club）の一環として、市内小学校PTA活動での環境学習活動の支援を行ってきている。その結果、PTA活動での環境学習活動が定着する一方で、形骸化し、LEAFに依存した単発的なイベントに陥る傾向が見受けられる。PTA委員の環境学習活動の企画・運営の意識を高揚させる事は、今後の環境教育の推進において重要な課題であろう。

そこで本研究では、兵庫県西宮市における小学校の学年PTA活動での環境学習活動の支援を通して、PTA委員の企画・運営の主体としての意識を高揚させるための方策の開発と検証を行った。

2．西宮市の環境教育活動の経緯

西宮市の環境教育の取り組みは、事業内容や運営体制など試行錯誤が繰り返されて今日にいたる。第1期（1985～）は、単発的なさまざまな形態の環境啓発事業が行われた時期である。第2期（1992～）は総合的で継続的な環境教育のあり方と市民の自主的な環境学習活動への支援体制づくりを目指し、EWC事業を展開した時期である。第3期（1998～）は、地域に根ざした環境学習システムの骨組みの確立に取り組んだ時期である。第4期（2002～）は、様々な主体が連携・協働し、持続可能な社会の構築に向けて取り組みを始めた時期である。

3．PTA委員の企画･運営意識を高める方策の開発

1999以降、LEAFでは年間約20件のPTA活動において、環境学習活動の支援をしてきている。現在の支援手順は学年PTA活動での環境学習活動支援の依頼からプログラム実施までの流れを右図に示す。

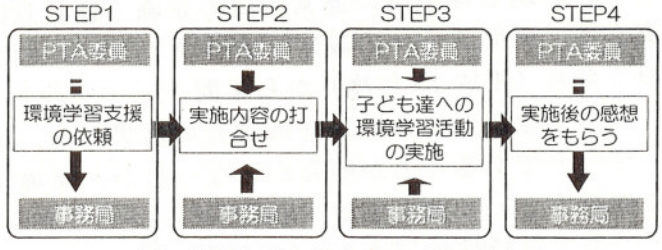

図　依頼から実施までの一連の流れ

＜PTA委員の意識高揚における問題点＞

- 事務局による過剰な環境学習活動支援のサービス提供
- PTA委員が活動内容について検討するタイミングの少なさ

＜改善方策の開発指針＞

- PTA委員にあまり負担になりすぎず、かといって事務局任せにならない程度で、PTA委員が主体的に実施内容について検討することができる方策。
- PTA委員の誰か一人に任せるのではなく、PTA委員全体で実施内容について検討し、共有化することで協力体制を形成できるような方策。
- 学校での学習活動と学年PTA活動での取り組みとが関連するように、PTA委員と学校や教員との協力体制が形成できるような方策。

＜改善方策＞

ステップ①からステップ②の間において、LEAF からの PTA 委員への働きかけを変える形で、下図の通り改善方策の作成を試みた。

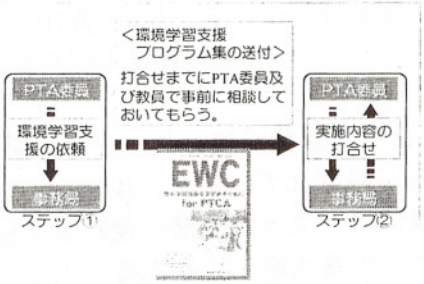

図 プログラム集提示モデル

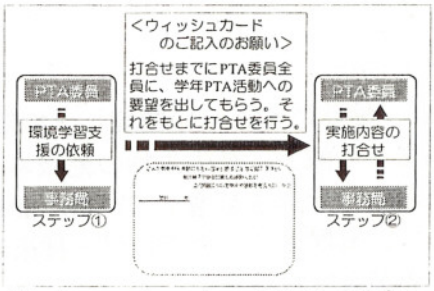

図 ウィッシュカード記入モデル

4．改善方策の試行と評価

PTA 委員から依頼時に「現状」、「プログラム集提示モデル」、「ウィッシュカード記入モデル」の 3 つの働きかけを行い、PTA 委員の主体者意識の違いを分析するためのアンケート調査（5 段階選択式）を行った。調査結果を右図、下表に示す。

＜調査時期＞2003 年 5 月～11 月

＜調査対象＞

現　　状・・・・・8 回（PTA 委員 27 名）

プログラム集・・・6 回（PTA 委員 18 名

ウィッシュカード・4 回（PTA 委員 26 名）

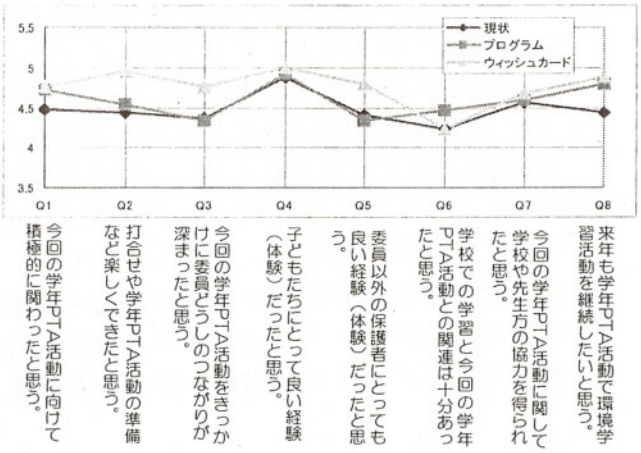

図　調査結果（回答項目をポイント化し平均値）
（そう思う 5 点、ややそう思う 4 点…そう思わない 1 点）

表　調査結果

調査項目	現状モデル	プログラム集	ウィッシュカード
自分たちが企画・運営の主体者であるという意識	△	○	◎
保護者も環境学習活動に取り組むことに対する意識	△	△	○
学校での学習内容との関連付ける意識	△	△	△
環境学習活動の継続性に対する意識	△	○	○

（現状を△とした場合、変わらずを△、やや効果あり○、効果あり◎としている）

5．考察 －PTA 委員の企画・運営意識の高揚方策

「環境学習プログラム集提示モデル」の試行結果からは、PTA 委員あるいは組織の環境学習活動の企画・運営の主体者としての意識の高揚が少し見受けられた。しかし、プログラム集を提示することは、PTA 活動で環境学習活動に取り組む目的を十分に検討することなく実施できるので、実施すること自体が目的化してしまい「保護者が環境学習活動に関わること」、「継続的・体系的な環境学習活動」といった企画・運営の主体者としての意識を育むに至らないこともうかがえた。環境学習プログラム集を提示するタイミングについては課題が残った。

「ウィッシュカード記入モデル」の試行結果からは、PTA 委員それぞれが PTA 活動で環境学習活動に取り組む目的を考え、PTA 委員全体でそれらを共有化していくといった一連のプロセスが意識を高揚させる上で効果があったと考えられる。しかし、環境学習に対するイメージを持てず、ウィッシュカードに何を書いて良いか分からないという場面や、逆に記入が多いものの、時間などの物理的な制約や、事務局のノウハウの蓄積量によってニーズに応じる事ができない場面への対応で課題も残った。また、PTA 委員と教師とが実施内容について一緒に相談することで、より効果的な活動にすることが可能になると考えられる。